

『カンタベリ物語』の不定代名詞

著者	藤原 保明
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	49
ページ	17-32
発行年	2006-03-31
その他のタイトル	Indefinite Pronouns in The Canterbury Tales
URL	http://hdl.handle.net/2241/13475

『カンタベリ物語』の不定代名詞

藤原保明

0. はじめに

伝統的に不定代名詞と呼ばれている範疇は、形容詞、数量詞(quantifiers)、決定詞(determiners)などの雑多な語から成るが、名詞や形容詞とほぼ同じ機能を果たすにもかかわらず、これまで相応の分析と記述はなされてこなかった。とりわけ、古英語、中英語、近代英語の不定代名詞に関する従来の記述は十分な情報源とはなっていない。中英語を例にとると、Mustanoja(1960)は網羅的であるが、個々の不定代名詞の記述は十分ではない。Rissanen(1967)はきわめて詳細であるが、対象はoneのみであり、しかも1300年以前の文献に限られている。一方、Fisher(1992)は最も新しいが、記述は偏っていて、内容に不正確なところがある。チョーサーの言語研究の場合、Kittredge(1891)は、*Troilus and Criseyde* という単一の作品の詳細な言語研究であるが、不定代名詞の情報は限られている。Kerkhof(1960)はチョーサーの全作品を対象とした詳細な統語研究であるが、不定代名詞などの小範疇語を網羅していない Tatlock(1927)を拠り所としていることから、その記述は必然的に十分なものとはなりえない。Elliot(1974)は大部なチョーサーの言語研究であるが、不定代名詞には全く言及していない。しかしながら、不定代名詞に係る言語事象は史的発達の観点からも重要であり、詳細な研究は不可欠であることから、本稿では、現在進行中の英語の不定代名詞に関する通時的研究のうち、中英語の不定代名詞に焦点を絞り、その言語特徴と問題点について考察したい。

I. 中英語の不定代名詞

中英語の不定代名詞はさまざまな種類の語によって構成されていることから、今回は対象を数量詞に絞り、any, ech, everich, every, many, much,

muchel, oon, som という9つの数量詞がチョーサーの『カンタベリ物語』においてどのような特徴を示すのかを明らかにしたい。なお、今回の分析には Benson (1987) を用い、用例の検索には Oizumi & Miki (1991) を活用し、各 Tale の名称の略記もこれに従う。

1.1. 中英語の普遍数量詞

中英語の数量詞のうち, al, bothe, ech, everich, every は普遍数量詞 (universal quantifiers) と呼ばれ, いずれも一つの集合 (set) のすべての要素 (elements) を指示する働きがある。このうち, 現代英語の every に対応するのは, 『カンタベリ物語』の場合, every と everich であるが, 両者の扱いはまちまちである。たとえば, MED や Benson は everich を every の異形とみなしているが, Skeat (1894) は両者を別語として扱っている。そこで, 最初に, every と everich は同一語の異形態とみなすのが正しいのか, それとも, 別語と考えた方が妥当なのかという点について考察したい。

現代英語の場合, every は ‘one as well as the others’, ‘without exception’, ‘each single’ などの意味を表す決定詞であり, 代名詞の用法は認められていない。したがって, このような意味を担った代名詞が必要な場合, thing, body, one を主要語 (head-words) とする複合語 (everything, everybody, everyone) に頼らざるをえない (Declerck 1991:292-3)。『カンタベリ物語』の場合, every は291例 (すなわち, 韻文中に231例, 散文中に60例) 生じるが, これらの例はすべて(1)のような決定詞として用いられていて, 代名詞の例は全く見当たらない。したがって, 『カンタベリ物語』の every は現代英語の every と全く同様の特性を有していることが分かる。なお, この作品では, 散文体で書かれているのは B.ME と I.PS の Prologue を除いた部分のみである。

- (1) a. And bathed *every* veyne in swich licour (A.GP 3)
 b. And “Nowel” crieth *every* lusty man. (F.FK 1255)
 c. and in *every* manere of outrageous thing (I.PS 743)

一方, everich は韻文中に27例, 散文中に20例, 合計47例が用いられているが, その大半の35例 (74.47%) は (2a, b) のような代名詞として機能している。一方, (2c) のような決定詞は12例, すなわち, 全体の約4分の1にすぎない。このように, everich は, 決定詞以外には用いられない every とは異なり, 代名詞としても用いられ, むしろこの用法の方が優勢であり, every に欠落している機能を補っているように思われる。

- (2) a. for *everich* wolde axen his owene thing. (LPS 923)
 b. And *everich* of us take his aventure." (A.KN 1186)
 c. He knew the cause of *everich* maladye, (A.GP 419)

Every と *everich* が決定的に異なるのは不定代名詞 *oon* との関係である。すなわち、*every* は、291例のすべてが決定詞であるにもかかわらず、*oon* と複合したり、*oon* を修飾することによって、代名詞の機能を担うことは全くない。これに対して、*everich* は、その大半がすでに代名詞として機能しているにもかかわらず、*oon* と複合し、その結果として生じた (3a, b) のような代名詞 *evericho(o)n* は30例も用いられている。ちなみに、(3c) のように *everich* が *oon* と複合しない例が1つ生じるが、これはテキストどおり、決定詞の *everich* と不定代名詞 *on* (= *oon*) から成る句とみなしておく。さらに、注目すべきことに、(3) のように *everich* と複合または共起する例は、韻文ではすべて行末に位置し、散文の部分に生じる20例の *everich* は *oon* とは一切共起しない。したがって、複合代名詞の *evericho(o)n*、および、決定詞 *everich* と *on* が共起する例は、韻文特有の何らかの制約を受けていると思われる。

- (3) a. Whan that hir names rad were *everichon*, (A.KN 2595)
 b. And *sitthen* hath he spoken of *everichone*, (B.ML 58)
 c. And seyde, "Goode men, herkeneth *everych on*! (B.ML 1164)

以上のように、*every* と *everich* には音韻、形態、統語上、明確な区別が存在することが確認されたことから、両者の相違の由来について考察したい。Onions(1966:332), Klein(1971:262), Koziol(1972:82)などによると、*every* と *everich* はいずれも古英語の *æfre* + *ælc*/**ylc* 'ever each' に由来する複合語であり、*ælc*/*ylc* は主要語であった。それゆえ、最初のうち、*everich* と *ech* が異なるのは、前者は後者より普遍性をより強く強調する点だけであった。このことから推測できるのは、チョーサーの頃は、より古い形態を留めている *everich* は *ælc* または *ylc* が維持していた代名詞の機能を保っていたが、より新しい形式である *every* は代名詞の機能を失ってしまったのではないかと、ということである。この仮説は、『カンタベリ物語』の *ech* が *everich* と同じ特徴を示せば、その正当性が検証されることになる。

そこで、次に *ech* を取り上げることにする。『カンタベリ物語』では *ech* は53例用いられているが、その大半の38例(71.70%)は(4a, b)のような代名詞の用法であり、(4c)のような決定詞は15例(28.30%)にすぎない。このように、*ech* が代名詞として機能する例の割合は *everich* の場合ときわめてよ

く似ていることから、我々の仮説が正しいことが分かる。それと同時に、Skeat は every には形容詞の 'every' のみを認め、everich には代名詞と形容詞の両方を認めているが、彼の判断は確かな事実観察に基づいていることが分かる。ちなみに、ech は散文の部分では全く用いられていないが、この理由は明らかではない。

- (4) a. And *ech* of hem hadde wyves mo than two, (D.WB 57)
 b. That *ech* of yow moot tellen ate leste (F.SQ 697)
 c. *Ech* man for himself, ther is noon oother. (A.KN 1182)

さらに、ech は oon と複合して echo(o)n となることがあるが、その分布は evericho(o)n の場合と一致している。すなわち、複合代名詞 echo(o)n は 9 例用いられているが、evericho(o)n の場合と全く同様、(5) に示したように、いずれも行末に限られ、さらに、散文の部分には全く生じない。これらの事実も前述の仮説の正しさを裏付ける有力な証拠となりうる。

- (5) a. We drunken, and to reste wente *echon*, (A.GP 820)
 b. That thurgh that land they preised hire *echone* (C.PH 113)
 c. And al so certein as we knowe *echoon* (E.CL 124)

なお、al と bothe は every, everich, ech と同様、普遍数量詞であるが、いずれも oon と共起しないことなどの理由により、今回は分析対象から除外した。

1.2. 中英語の多数・多量を表す数量詞

中英語の数量詞のうち、many, muche, muchel は多数・多量を表す。『カクタベリ物語』の場合、(6a, b) のように much と muchel が many を表す例がまれに生じるが、many は加算名詞を、much は質量名詞 (mass nouns) を修飾するという現代英語における区別は原則的に当てはまるように思われる。すなわち、many の場合、個別が多いことを強調した many a/an + 単数名詞という (6c~e) のような配分用法は、韻文中に 145 例、散文中に 19 例生じるが (藤原 2004:16-19)、muche と muchel の場合、このような用法は全く確認できないことから、muche と muchel は加算名詞と共起しないと判断できる。

- (6) a. Ye han seyde *muche* thing right wel, I seye; (D. FR 1273)
 b. To *muchel* folk we doon illusion, (G. CY 673)
 c. He hadde maad ful *many a* marriage (A.GP 212)
 d. Ther is ful *many an* eye and *many an* ere (D. SM 2051)

e. Where *many a* tour and toun thou mayst biholde, (E.CL 60)

ちなみに、*many* と *muchel/muchel* のいずれにも修飾されることから、加算と不加算のいずれにも該当すると思われる名詞が存在するが、該当例は (7a~c) の *thyng* と (7d, e) の *labour* の 2 語だけである。この背景として、チヨースーの頃は、*thing* には意味の拡張 (*semantic extension*) が相当進んでいたこと (Guimier 1985:161)、*labour* には (7d) のような ‘*toil*’ という抽象的な概念と、(7e) のような ‘*a task, project*’ という具象的な意味が備わっていたからであると考えられる。

- (7) a. ye shul considere *many* thynges. (B.ME 1202)
 b. Than homicide or *many a* cursed thing; (C.PD 644)
 c. Ye han seyde *muchel* thing right wel, I seye; (D.FR 1273)
 d. These olde folk kan *muchel* thing,” quod she. (D.WB 1004)
 e. That *muchel* drynke and labour wolde han reste; (F.SQ 349)
 f. Where *many a* labour, *many a* greet emprise (F.FK 732)

Muche と *muchel* の間には意味および統語上の区別は認められないが、『カンタベリ物語』の韻文中の *muche* と *muchel* が生じるすべての行を律読 (*scansion*) したところ、*muche* が (8a) のような強弱のリズム型 (*trochee*) を形成するのは 31 例中 11 例 (35.48%) にすぎないのに対して、*muchel* は (8b) のように 31 例中 27 例 (87.10%) が強弱のリズム型を形成することが明らかとなった。それゆえ、両者にはリズム上かなり明確な区別があったことが分かる。

- (8) a. He háth to-dáy taught ús so *múche* góod (D.SM 2281)
 b. I wól nat wírche as *múchel* ás a gnát. (D.WB 347)

Many と *muche/muchel* の相違は *oon* との修飾関係において決定的なものとなる。すなわち、*many* は *oon* を修飾できるのに対して、*muche* と *muchel* にはこの可能性が全くない。そこで、*many oon* の例を調べてみると、興味深いことに、*many oon* は韻文中に 18 例、散文中に 1 例、合計 19 例生じるが、このうち、韻文中の 18 例のうち 17 例は (9a, b) のように行末に位置し、それ以外の位置を占めるのは、(9c) の 1 例と散文中に生じる (9d) の 1 例のみであることが分かった。なお、行末に生じる (9a, b) の例では、*many* の末尾の母音 -y [-i] は維持され、すべての例において韻律上の弱強勢を受けるが、行中では、(9c) のように後続の *oon* と接語化 (*cliticization*) を起して半母音の -y [-j] となることから、韻律に関与することはない。

- (9) a. Of fées and róbes hádde he *mány óon*. (A.GP 317)
 b. his bóokes ánd his bágges *mány óon* (B.SH 82)
 c. Is cómpleyníng. Hou *mány óon* máy men fýnde (B.ML 929)
 d. ful *many oon* at that tyme feeleth in his herte ful wickedly.
 (I.PS 559)

1.3. 中英語の少数・少量を表す数詞

少数・少量を表す中英語の不定代名詞のうち、現代英語の little に相当する *lyt* と *lyttil* は形容詞用法に限られることから、不定代名詞と決定詞のいずれにも用いられるのは *som* のみとなる。『カンタベリ物語』の場合、*som* は、屈折形の *some* と *somme* を含め、合計216例、すなわち、*som* は143例（韻文117例、散文26例）、*some* は13例（韻文12例、散文1例）、*somme* は60例（韻文48例、散文12例）用いられている。このうち、(10a~c) のような決定詞の例が圧倒的に多いが、(10d~f) のような代名詞の用法もかなり多くみられる。しかしながら、*som* が *oon* を修飾したり、複合する例は、*every*, *much*, *muchel* の場合と同様、全く見当たらない。この理由は、Mustanoja (1960:211, 259-63) も指摘しているとおおり、不定冠詞の *som*, *any*, *an* は古英語期以来、個別化 (*individualization*) を表すために用いられ、チョーサーの頃もこの機能がある程度維持されていたことから、同じく個別を強調するために用いられた *oon* との結合ないしは共起は敬遠されたと考えられる。

- (10) a. *Som* drope of pitee, thurgh thy gentillesse, (A.KN 920)
 b. wherfore *some* folk stonden of hir owene wyl (I.PS 835)
 c. Save in *somme* thynges that he was to blame; (E.CL 76)
 d. *Som* in his bed, *som* in the depe see, (A.KN 3031)
 e. *Somme* with the balled, *somme* with the thikke herd; (A.KN 2518)
 f. And *somme* of hem wondred on the mirour, (F.SQ 225)

1.4. 中英語における any

現代語の *any* は、他の数量詞とは異なり、特定の数または量が意図されることはなく、分布上も厳しい制限が伴う。具体的には、*any* は (11a) のように選択の自由 (*freedom of choice*) または任意性 (*arbitrariness*) が保証される文脈にのみ生じ、否定文、疑問文、条件文などに生じる (11b~d) のような「極性項目 (*polarity item*) としての *any*」と、総称的環境にあるか、それとも

法助動詞などと共起し、普遍数量詞的な意味を担う (11e, f) のような「自由選択 (free choice) の any」に大別できる (Vendler 1967:79-81; Declerck 1991:302-5; 加賀1997:309)。

- (11) a. There are some peaches on the table. You can take *any* (**one**) of them.
 b. I won't tolerate this *any* longer!
 c. Is she *any* better now?
 d. If you should have *any* difficulty, let me know.
 e. *Any* suggestion is welcome.
 f. *Any* child could do that!

今回、『カンタベリ物語』に生じるすべての any, すなわち、韻文中の170例と散文中の41例、合計211例を分析したところ、any は (12a, b) のような自由選択の意味を強調する文脈や、(12c~e) のような疑問、条件、否定の文脈において規則的に用いられていて、現代英語の any と似た統語的・意味的特徴を示すものの、oon を修飾する any, および、any と複合した anyo(o)n という例が全く生じないという点において、現代英語の any とは決定的に異なる。このような例の欠落には、1.3. で指摘した理由が関与していると思われるが、中英語の他の文献には複合代名詞の anyo(o)n, および、any が oon を修飾する例が Rissanen (1967:259-60) で若干確認されていることから、any と oon の複合または共起については今後の検討課題としたい。

- (12) a. His berd as *any* sowe or fox was reed, (A.GP 552)
 b. Thy wo and *any* wo man may sustene. (B.ML 847)
 c. Is ther *any* coper herinne?" seyde he, (G.CY 1292)
 d. if *any* of thy kynrede have synned with hire (I.PS 962)
 e. All one, withouten *any* compaignye. (A.KN 2779)

II. 中英語の数詞

これまでの分析から明らかなおり、『カンタベリ物語』の場合、数量詞の ech, everich, many は oon との複合または共起が可能であり、その例のほとんどが韻文、とりわけ行末に限られている。そして、他の数量詞はこのような特徴を示すことは全くない。このような際立った言語事象には特別な背景があると思われるが、それは一体どのようなものであり、言語学的観点、とりわけ

不定代名詞の史的發達といかなる関わりがあるのであろうか。今回、解決の糸口を *oon* に求め、考察してみたい。

2.1. 中英語の数詞

『カンタベリ物語』の場合、現代英語の *one* に対応する語形は一般に *oon* または *on* であるが、今回は *oon* に限定して分析した。On および弱形の *o* を割愛したのは、*oon* だけでも有効な一般化が導き出せる例が得られそうであること、異形態を含めると対象が膨大な数となること、前置詞の *on* と選別する困難な作業が伴うこと、などの理由による。『カンタベリ物語』の場合、*oon* は171例（韻文中に136例、散文中に35例）生じ、(13a, b) のような代名詞、または (13c, d) のような決定詞として用いられている。いずれの場合も、*oon* は単一の人や物に限られ、それ以上の数を表すことはない。

(13) a. Ther lyth *oon* upon my wombe and on myn heed.

‘There lies one on my stomach, and (another) on my head’

(A.RV 4290)

b. That *oon* of hem is solempane, another is commune, and the thridde is privee. (I.PS 102)

c. That hath but *oon* hole for to sterete to, (D.WB 573)

d. from *oon* Estre day unto another Estre day, (I.PS 552)

2.2. 中英語の数詞と数量詞

そこで、(14) のような数量詞のスケールを用いて、これまでとりあげた数量詞と *oon* の関係を考察してみたい。最も明白なことは、*oon*, *a/an*, *any*, *som* は「一人、一つ、一個」などの確定した数量を表すのに対して、*som(m)e*, *many/muche/muchel*, *al/bothe/ech/every/everich* は、指し示す数量に差異はあるものの、いずれも不確定な数量を表している。したがって、*many oon*, *echo(o)n*, *evericho(o)n* のような、不確定な数量詞が確定数の *oon* と複合したり、共起する例は、そもそも論理的に矛盾したものである。『カンタベリ物語』に *any oon*, *every oon*, *som oon* が全く生じない事実をこの矛盾に帰することができよう。それと同時に、*many oon*, *echo(o)n*, *evericho(o)n* という表現が散文ではほとんど用いられず、韻文では脚韻位置に限られたきわめて特殊なものであるのは、矛盾した語をあえて用いようとした結果であるという解釈も可能であろう。しかしながら、*many oon*, *echo(o)n*, *evericho(o)n* と

いう矛盾した表現がなぜ、あえて用いられているのかという説明はできない。
(14)

definite	indefinite		
1	少量・少数	多数・多量	すべて
oon, a/an, any, som	som(m)e	many, muche, muchel	al, bothe, ech, every, everich

そこで、語源と意味の上で密接な関係にある数量詞 oon と不定冠詞 a/an が他の数量詞とも似た関係を示すかどうか、掘り下げてみたい。すでに述べたとおり、oon は many, everich, ech によって修飾されるが、a/an + 単数名詞の場合も、(15a~c) のように、many のみならず、eveich と ech にも修飾される。すなわち、(15d) に示したように、『カンタベリ物語』では、many, everich, ech は oon と a/an + 単数名詞との修飾関係において強い相関を示すが、他の数量詞 (any, som, every など) はこのような相関を示さない。したがって、焦点は oon と a/an + 単数名詞の相違に絞られる。

- (15) a. And many a lovely look on hem he caste, (A.MI 3342)
 b. He moot reherce as ny as evere he kan / Everich a word, if it be
 in his charge,
 'He must repeat every word as close as he can, if it be his respon-
 sibility' (A.GP 733-4)
 c. That is assailed upon ech a side. (D.WB 256)
 d.

	oon	a/an + 単数名詞
many	○	○
everich	○	○
ech	○	○
every	×	×
som	×	×
any	×	×

2.3. 不定冠詞 a/an の出現と数詞 oon との関係

12世紀以降、古英語の数詞 ān から不定冠詞 a/an が発達してくると、many a~, such a~, ech a~などの配分用法が出現する。その一方で、many, everich,

ech が古英語の *ān* のもう一つの反映形 (reflex) である *oon* を修飾する例も生じてくる。Skeat(1950), Baugh(1964), Benson(1987)はいずれも, many *oon*, *echo(o)n*, *evericho(o)n* にそれぞれ 'many a one', 'each one', 'every one' という解釈を与えている。このうち, many a one という名詞句は『カンタベリ物語』では用いられておらず, また, a one という名詞句は, 少なくとも現代英語では修飾要素 (modifier) が介在しなければ許されないことから (Declerck 1991:289; Swan 1995:392), Skeatらはこの one を man, thing, year などの加算名詞の総称とみなしている可能性がある。しかし, その場合, many a/an + 単数名詞と many *oon* は同じことを表していることになるが, これは果たして事実なのであろうか。

2.3.1. 中英語における支柱語の *oon* と照応関係

この疑問を解消するためには, *oon* の代名詞用法を精査する必要がある。『カンタベリ物語』で用いられている代名詞の *oon* は, (16a~c) に示したように, ほとんどの例において, 下線で記した既出の事柄や概念に言及する前方照応的 (anaphoric) な支柱語 (prop-word) として用いられている。言い換えると, *oon* は旧情報 (old information) を導入する場合に用いられている。なお, (16d, e) のように of phrase を従える場合も前方照応的とみなせる。

(16) a. ...a carpenteer, / Peraventure in scorn, for I am *oon*.

(A.RV 3914-5)

b. ...the mooste steadfast wyf, / And eek the mekeste *oon* that be-
reth lyf;

(E.MC 1551-2)

c. ...of a thousand men, *oon* wol nat forsaken hire ne refusen hire.'

(B.ME 1557)

d. of fees and robes hadde he many *oon*.

(A.GP 317)

e. ...wedded folk ... if that *oon* of hem be wedded,

(I.PS 840)

一方, *oon* が前方照応的ではないと思われる (17) のような場合は 3 例確認できたが, これらはいずれも「ある人」(somebody, someone) を意味していることが文脈から明らかな場合に限られ, したがって, この *oon* は (16) のような旧情報ではなく, 新情報 (new information) を担っていることになる。

(17) a. This carpenter out of his slomber sterte, And herde *oon* crien
"water" as he were wood,

(A.MI 3816-7)

b. ...under subjeccioun / Of *oon*, she knoweth nat his condicioun?

(B.ML 271)

c. "Pardee," quod *oon*, "somewhat of oure metal

(G.CY 942)

2.3.2. Many *oon*, *echo(o)n*, *everycho(o)n*の機能

それでは、*many*, *ech*, *everich* と共起または複合している代名詞 *oon* はどのような資格で用いられているのであろうか。すでに指摘したとおり、*many* が *oon* を修飾する例は17例ある。これに *oon* の異形である *on* を伴う2例の *many on* を加えると、合計19例(韻文に18例、散文に1例)となる。このうち、大半の15例では(18a~c)のように先行する名詞(句)を受け、しかも、*many oon* はこれらの名詞(句)と並列(*appositive*)している。一方、(18d)のように、*of phrase* を従える場合は2例にすぎない。いずれにせよ、19例中17例は前方照応的な支柱語であり、詩の行末に生じるといふ顕著な特徴を示す。一方、(18e, f)にあげた2例の *many oon* の場合、(18e)は韻文の例であるにもかかわらず、行末以外の位置に生じ、また、(18f)は韻文中ではなく散文体の部分に生じていることから、いずれも例外のように見える。しかしながら、この2例は他の17例とは異なり、共に *many a man* という意味を表し、既存のいかなる名詞句も受けない新情報として用いられている。したがって、*many oon* の *oon* は、詩の行末に生じると旧情報として既出の語句と照応関係を示すが、その他の位置に生じると新情報を担うという一般化ができる。したがって、残された課題は、『カンタベリ物語』の場合、*many* と共起する前方照応的な支柱語の *oon* はなぜ行末という位置に限られるのかということである。

- (18) a. As it were blody dropes *many oon*; (A.KN 2340)
 b. And herbes koude I telle eek *many oon*, (G.CY 799)
 c. Som tyrant is, as ther be *many oon*, (E.MC 1989)
 d. And of oure othere doctors *many oon*, (D. FR 1648)
 e. ... Hou *many oon* may men fynde / That ... been outhere slayn or shente! (B.ML 929-31)
 f. -ful *many oon* at that tyme feeleth in his herte (I.PS 559)

次に、代名詞 *evericho(o)n* の場合はどのような特徴を示すのであろうか。興味深いことに、該当する30例はすべて韻文に限られ、しかも、行末以外には生じないという、*many oon* よりはるかに明確な特徴を示す。さらに、このうちの29例では、(19a~c)のように先行する名詞(句)または代名詞を受ける前方照応的な用法である。残る1例の(19d)は、『カンタベリ物語』では、単独の *oon*

であれ、複合代名詞であれ、manyと共起する場合であれ、後方照応的な代名詞としては唯一の例となっている。ちなみに、この例の場合、ofの目的語の名詞句が一行を形成しうるほど長いことから、チャーサーはやむなく代名詞 *everichone* を前置したと思われる。一方、(19e)の *everychon* は先行の *the wisest child* を受け、all という意味を表す例の一つとなっている。

- (19) a. I shrewe thise shrifte-fadres *everychoon*.
 'I will curse these confessors every one' (D.FR 1442)
 b. And whan we be togidres *everichoon*, (G.CY 960)
 c. So hadde I spoken with hem *everichon* (A.GP 31)
 d. And sitthen hath he spoken of *everichone*, Thise noble wyves and
 thise loveris eke. (B.ML 589-90)
 e. That was the wisest child of *everychon*;
 'who was the wisest child among them all' (B.MK 2155)

次に、echo(o)n の場合、*evericho(o)n* と全く同様に、9つの例はすべて韻文中で、しかも行末で用いられているが、いずれも(20)の例のように、先行する名詞(句)または代名詞を受けていて、(19d)のような後方照応的な例は一つも生じない。さらに、echo(o)n は *ech thyng* や *ech of us* のような決定詞または代名詞として用いられた *ech* とは異なり、先行の名詞(句)と同格の語として付加されたにすぎない。

- (20) a. Unto the folk that fогhten thus *echon* (A.KN 2655)
 b. Help us to scape, or we been dede *echon* (A.MI 3608)
 c. And fro Maxime, and fro his folk *echone*, (G.SN 377)

これまでの分析結果を総合すると、many oon, *everycho(o)n*, echo(o)n のほとんどすべての例は韻文の行末に生じ、既出の名詞または代名詞と照応関係にあり、支柱語として機能している。一方、代名詞として単独で用いられた oon も類似の特徴を示すが、oon には行末という制約は課されていない。

2.3.3. Many/everich/ech a/an + 単数名詞の特徴

それでは、many/everich/ech a/an + 単数名詞と many oon, *everycho(o)n*, echo(o)n はどのような関係にあるのであろうか。すでに指摘したとおり、Skeat, Baugh, Benson は many oon と many a/an~を同等とみなしている。今回、すでに示した(6a~c)と(7b, f)も含めたすべての many a/an~の例と、(15b, c)の *everich a~*, *ech a~*の例を分析したところ、注目すべきことに、

これらの形式はいずれも新情報を導入する場合に用いられていて、照応関係は認められず、行中および文中で占める位置についても何ら制約がないことが明らかとなった。このような特徴は、oonと複合または共起する3種類の代名詞 many oon, echo(o)n, everycho(o)nにはほとんど認められないものであり、二種類の配分用法の区別に決定的に関わるものとなっている。

3. 詩的許容とは何か

最後に、支柱語の many oon, everycho(o)n, echo(o)n は韻文に限られ、しかも行末に位置するという特異な現象に対して言語学的に納得のいく説明を施さねばならない。

(21a, b) のような二行韻(couplet rhyme)であれば、(21c) のような交互韻(alternate rhyme)であれば、couple を形成する2つの行について、先行する行末の位置を a, 後続の行末の位置を b で表し、両者を区別することにする。詩人は推敲を重ねながら作詩に努めたであろうが、many oon, everycho(o)n, echo(o)n を用いる場合、これらの代名詞は既出の名詞(句)を強調することが目的となっていて、統語上、余剰性(redundancy)が高いことから推測すると、(21a)のように、先行する [o:n] という行末のライム(rhyme)に合わせるために、これらの代名詞を後続の行末に用いた方が、これとは逆の(21b, c) のような場合よりも自然であると思われる。そこで、前者を無標(unmarked)の脚韻、後者を有標(marked)の脚韻と呼ぶことにする。そして、many oon(17例), echo(o)n(9例), evericho(o)n(30例)のそれぞれが a または b のいずれの位置に生じるかについて分析してみた。その結果、(21d)に示したように、many oon の大半は無標の位置を占めるのに対して、echo(o)n はほぼ同数、evericho(o)n は many oon とは逆に、全体の3分の2は有標の位置を占めることが明らかとなった。しかし、合計すると無標と有標の頻度はほぼ同じであることから、チャョーサーは脚韻を合わせることを目的として3種類の代名詞を行末に置いたのではないと思われる。なぜなら、3種類の代名詞はほとんどすべて、新情報として導入された名詞(句)の「個別」を強調するために用いられていて、名詞(句)と同格の語句として並列していることから、チャョーサーは各行において最も卓立した(prominent)位置である行末を選んだと考えられるからである。さらに、3種類の代名詞は、とりわけ many oon と evericho(o)n は、たとえば『カンタベリ物語』とほぼ同時期の *Piers Plowman* では全く用いられ

ていないことを考えると、かなり革新的な表現であったことから、散文に用いるには抵抗があったものの、韻文の場合、脚韻位置には詩的許容(poetic license)があったことから、詩人はこれを活用したものと思われる。

- (21) a. And at the brondes ende out ran anon
 As it were bloody dropes *many oon*; (A.KN 2339-40)
- b. Thanne telle I hem ensamples many oon
 Of olde stories longe tyme agoon. (C.PD 435-6)
- c. With torment and with shameful deeth *echon*
 This provost dooth thise Jemes for to sterve
 That of this mordre wiste, and that anon. (B.PR 628-30)
- d.

種類 \ 位置	a	b
many oon	4	13
echo(o)n	5	4
evericho(o)n	20	10
合計	29	27

まとめ

12世紀以降、不定冠詞 a/an が発達してくると、many a/an + 単数名詞という配分用法が好まれるようになり、これと類似の everich/ech a/an + 単数名詞という形式も出現し始める。一方、数量詞 oon の支柱語としての用法が普及してくると、oon は many oon, evericho(o)n, echo(o)n という個別を強調する形式にも用いられるようになった。そのため、個別を強調する形式は、many/everich/ech a/an + 単数名詞と many oon, everich/ech + oon の2種類が併存することとなったが、両者は競合することなく、前者は新情報として、後者は旧情報として、役割を分担した。しかし、旧情報を担う many oon, everich/ech + oon はきわめて革新的な形式であったものと思われる。その根拠は、この形式が既存の名詞(句)と同格の語(句)として、しかも、詩的許容が認められる韻文の行末以外には生じないことにある。もっとも、oon そのものは、照応関係がなくても、単独で不特定の「人」(somebody, someone)を表したことから、many に修飾された場合でも、many oon は不特定の人が個別に多いことを表すことができ、新情報を担っていることから、この形式には分

布上の制約はなく、散文にも、行末以外の韻文にも生じることができた。なお、many, everich, ech 以外の数量詞が a/an および oon を修飾する例と両者が複合する例は全く存在しない。以上は、チョーサーの『カンタベリ物語』の不定代名詞のうち、many, any, ech など、9つの数量詞を分析した結果、明らかになったことである。したがって、チョーサーの他の作品や、それらと同時期、または相前後する時代の文献において、同様の言語特徴が確認されるかどうかは今後の課題となる。

参考文献

- Baugh, Albert Croll, ed. (1963) *Chaucer's Major Poetry*, Prentice-Hall, New Jersey.
- Benson, Larry D., ed. (1987) *The Riverside Chaucer*, Houghton Mifflin, Boston.
- Benson, Larry D., ed. (1993) *A Glossarial Concordance to the Riverside Chaucer 1*, Garland Publishing, New York & London.
- Blake, Norman, ed. (1992) *The Cambridge History of the English Language II*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.
- Elliot, Ralph W. (1974) *Chaucer's English*, Andre Deutsch, London.
- Fisher, Olga (1992) "Syntax", *The Cambridge History of the English Language II*, ed. by Norman Blake, 207-408, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fujiwara, Yasuaki (藤原保明) (1991) 「‘many a ~’ の用法と起源」『英語青年』136巻12号。
- Fujiwara, Yasuaki (藤原保明) (2004) 「通時的英語研究の問題: 韻文か散文か」『言語文化論集』65号。
- Fujiwara, Yasuaki (藤原保明) (2004) 「集合数詞 many の史的発達」『近代英語研究』第20号。
- Kaga, Nobuhiro (加賀信広) (1997) 「指示と照応と否定」(日英比較選書4) 研究社, 東京。
- Kittredge, George Lyman (1891) *Observations on the Language of Chaucer's Troilus*, Chaucer Society. [Reprinted, 1969, Russel & Russel, New York.]
- Klein, Ernest, ed. (1971) *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*, Elsevier, Amsterdam, Oxford, New York.
- Koziol, Herbert (1972) *Handbuch der englischen Wortbildungslehre*, Carl Winter, Heidelberg.
- Kurath, Hans, Sherman M. Kuhn, Robert E. Lewis, et al. eds. (1952-2001) *Middle English Dictionary*, University of Michigan Press, Ann Arbor.

- Mustanoja, Tauno Frans (1960) *A Middle English Syntax*, Société Néophilologique, Helsinki.
- Oizumi, Akio and Kunihiro Miki, eds. (1991) *A Complete Concordance to the Works of Geoffrey Chaucer X*, Olms-Weidemann, Hildesheim, Zürich, New York.
- Onions, Charles Talbut, ed. (1966) *The Oxford Dictionary of English Etymology*, Clarendon Press, Oxford.
- Rissanen, Matti (1967) *The Uses of One in Old and Early Middle English*, Mémoires de la Société Néophilologique de Helsinki XXXI, Société Neophilologique, Helsinki.
- Skeat, Walter William, ed. (1984) *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, Clarendon Press, Oxford.
- Swan, Michael (1995) *Practical English Usage*, Oxford University Press, Oxford.
- Tatlock, John S. P. and Arthur G. Kennedy, eds. (1927) *A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer*, The Carnegie Institutions of Washington. [Reprinted, 1963, Peter Smith, Gloucester.]
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca, New York.

[本稿は平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（C）「英語の不定代名詞の通時的研究」（研究代表者：藤原保明，課題番号：17526317）の交付を受けて行われた研究成果の一部である。]